



会報 JAMT

JAPANESE ASSOCIATION OF MEDICAL TECHNOLOGISTS

発行所

一般社団法人 日本臨床衛生検査技師会

発行責任者 横地常広

編集責任者 深澤恵治

〒143-0016 東京都大田区大森北4丁目10番7号

TEL (03) 3768-4722 FAX (03) 3768-6722

ホームページ <https://www.jamt.or.jp>

P1～P4 在宅医療 特集/P5 国際活動報告

P6 令和7年度 医療安全管理者養成講習会（基本コース）開催報告

P7 令和7年度認定救急検査技師制度 第2回指定講習会（大阪）開催報告

P8 三重県臨床検査技師会 「災害時における臨床検査技師の派遣に関する協定」を締結

P9 季刊誌『ピペット』に寄せられた感想

在宅医療 特集

11月23日は「在宅医療の日」



在宅医療の現場では、チームで支える医療がますます重要になっています。その中で注目されている一つが、臨床検査技師によるタスク・シフト/シェアの取り組みです。病院の検査室を飛び出し、患者さんのご自宅で採血や検査を行うなど、技師の活動の場は広がっています。今回の特集では、全国の学会で発表された事例を通じて、在宅医療の中で臨床検査技師がどのように活躍し、医療の質を支えているのかをご紹介します。新しい時代に向けた、私たちの可能性を一緒に考えてみましょう。

第19回東京都医学検査学会【在宅医療シンポジウム】

臨床検査イノベーション ～在宅医療の世界～

医療法人あんず会 宮下 勉

第19回東京都医学検査学会

テーマ：心・技・知 ～臨床検査技師の未来を創るのは今～

会 期：2024年12月8日（日）

会 場：秋葉原UDX

学会長：益田 泰蔵（国立病院機構 東京医療センター）

【在宅医療シンポジウム】

テーマ：臨床検査イノベーション ～在宅医療の世界～

座長：竹澤 理子（三井記念病院）

宮下 勉（医療法人あんず会）

①在宅医療・訪問診療実習の必修化を通して

大月 彩那、小玉 萌香、齋藤 胡桃（女子栄養大学 栄養学部
保健栄養学科栄養科学専攻 3年）

②当院における臨床検査技師の現在の取り組みと今後の展望

杉田 絵理（医療法人社団Plexus 大江戸江東クリニック）

③チャレンジ！在宅医療における臨床検査技師のタスク・シフト/シェア

藤井 南（医療法人あんず会 杏クリニック）



シンポジウム風景

取り組みを指す。そうした観点から見れば、在宅医療は従来の病院医療と対比し得る新しい医療の形であり、まさにイノベーションと位置づけられるものである。

また、タスク・シフト/シェアは臨床検査技師にとってのイノベーションであり、在宅医療の現場で活躍する技師にとっても変革を加速させる重要な要素となっている。さらに近年では、教育の分野においても在宅医療は必須であるとの考えが浸透しつつある。

本セッションでは、在宅医療の現場で活動する2名の臨床検査技師が発表を行った。症例や事例を交えての日常業務の紹介は、在宅医療における検査技師の役割を具体的にイメージできる内容であった。特に、タスク・シフト/シェアによって可能となった採血後のルート確保の実践や、輸血部での経験を基盤に運用し

第19回東京都医学検査学会において、「臨床検査イノベーション ～在宅医療の世界～」をテーマとするシンポジウムを開催した。学会のサブテーマである「未来を創る」を踏まえ、「臨床検査イノベーション」を主眼に企画したものである。

イノベーションとは、革新的な技術や発想によって新たな価値を生み出し、社会に大きな変化をもたらす



登壇者の集合写真、岡田院長と井越教授を交えて

ている在宅輸血の管理・システムは、参加者にとって大きな関心を集めるものであった。同時に臨地実習として訪問診療の同行見学を行った学生達から参加しての感想などの発表があった。

また、フロアより大江戸江東クリニックの岡田院長から経営者・医師の視点で、女子栄養大学の井越教授からは教育者の視点でご発言をいただいた。

180名収容の会場はほぼ満席となり、シンポジウム終了後には登壇者と参加者の間で活発な意見交換が行われ、盛況のうちに幕を閉じた。本セッションを通じて、在宅医療に関心を持ち、今後の活動に参画する臨床検査技師が一人でも多く増えることを期待するものである。

第74回日本医学検査学会 【シンポジウム2】

在宅医療で臨床検査技師ができることと今後の展望

医療法人あんず会 杏クリニック 川端 城聖

第74回日本医学検査学会

テーマ: +α ～臨床に貢献できる検査技師とは～

会 期: 2025年5月10日(土)・11日(日)

会 場: グランキューブ大阪(大阪国際会議場)

学会長: 湯田 範規

(独立行政法人労働者健康安全機構 山陰労災病院)

【日臨技企画2 シンポジウム2】

テーマ: チームの中で働く臨床検査技師に向けて

座長: 西浦 明彦(医療法人創起会 くまもと森都総合病院/
日臨技代表理事副会長)

宮原 祥子(伊那中央病院/日臨技執行理事)

①糖尿病療養指導の現場で臨床検査技師が求められること

前田 佳成(小牧市民病院)

②在宅医療での臨床検査技師ができることと今後の展望

川端 城聖(医療法人あんず会 杏クリニック)

③ER で臨床検査技師が活躍するためのスタートアップ

吉田 香菜(近畿大学病院)

④睡眠関連業務における臨床検査技師の役割

～地域医療連携施設との関わり～

黒崎 幸子(太田西ノ内病院)

第74回日本医学検査学会において「日臨技企画2 シンポジウム2 チームの中で働く臨床検査技師に向けて」の登壇機会をいただいた。その講演内容をご紹介します。

各方面で活躍する諸先輩に混じっての発表は緊張の

連続ではあったが、自身の思いも含めて在宅医療に従事する検査技師については伝わったのではないかと思います。

余談ではあるが、懇親会において図らずとも豪華な商品をいただき家族への土産とさせていただいた。本セッションを企画していただいた皆様に、あらためて御礼申し上げます。

懇親会にてカニをゲット！
鳥取市長とツーショット

私は訪問診療クリニックにおいて臨床検査技師として勤務している。近年、超高齢社会の進展に伴い、「入院」「外来」に次ぐ“第3の医療”として在宅医療の重要性が一層高まっている。在宅医療とは、通院困難な患者に対し、医師が自宅や施設を訪問し、24時間365日体制で療養を支援する包括的医療システムである。

従来、在宅医療に臨床検査技師が関与することは稀であった。しかし近年、在宅医療の現場においても臨床検査が果たす役割の重要性が再認識されつつある。その背景には「在宅医療に対する認識の変化」がある。かつては「在宅医療＝人生の最終段階にある患者への緩和的・日常的管理」という位置づけが主流であったが、現在は「急性期疾患や重症慢性疾患を自宅で継続治療する」という形態が増加している。こうした変化に伴い、病態を客観的に評価する臨床検査の意義は極めて大きくなりつつある。

加えて、タスクシフト・シェアの推進、検査機器の小型化・高精度化といった環境変化も、臨床検査技師の新たな活躍の場を拡大させている。病院内検査室にとどまらず、患者の生活の場である「在宅」に臨床検査技師が赴くことは、医療の質保証に直結する。また、オンライン診療の拡大により、医師が必ずしも対面診療を行わない局面が増えることが予想されるが、採血・採尿・生理機能検査など多くの検査は現場でしか実施できない。したがって、在宅領域における臨床検査技師の介在は今後ますます不可欠になると考えられる。

当クリニックにおける臨床検査技師の関与を具体的に示す。

1) 訪問診療への同行

通常の検査業務に加え、バイタルサイン測定や生活環境の観察を行い、生活者視点に基づいた診療補助を担っている。医師単独では得にくい情報を多角的に把握する点に意義がある。



シンポジウム発表風景

2) 臨床検査技師による単独訪問

医師の指示のもと、臨床検査技師が単独で患者宅を訪問し、採血・心電図・心臓超音波検査等を実施し、迅速に結果を医師へ報告している。単独訪問は、医療資源の効率的運用を可能とし、病態把握や治療方針決定の迅速化に寄与している。これにより、患者に提供する医療の質を高める効果が期待される。

さらに、在宅医療チームの一員として活動する上で、私が重視している点を2つ挙げる。

1) 患者の状態や意思を踏まえた、適切かつ最小限の検査提案

在宅療養患者にとって、医学的には必要でも、身体的・精神的負担の大きい検査は少ない。臨床検査技師は検査の適応を吟味し、最も適切な方法を選択する判断力が求められる。

2) 検査を契機とした患者・家族の心理的支援

在宅療養においては、患者が不安や苦痛を抱え、家族も介護負担に直面していることが多い。検査の場面を通じて傾聴・共感を行い、内面的苦痛を緩和することも臨床検査技師の重要な役割である。その際に得られた患者・家族の思いを医師に共有することで、医療の質を多面的に向上させることができる。

在宅医療における臨床検査技師の活動は未だ発展途上である。しかし、それはすなわち未開拓の分野に無



登壇者の集合写真

限の可能性が広がっていることを意味する。在宅医療に関心を持ち、新たな挑戦に取り組む臨床検査技師が増えることで、多くの患者が自宅で安心して療養生活を送れる社会の実現に資すると確信するものである。

第7回日本在宅医療連合学会大会 【日本臨床衛生検査技師会・日本在宅臨床検査研究会 共催企画】 在宅医療ダイバーシティ (diversity)

～臨床検査（技師）の深化～

医療法人あんず会 宮下 勉

第7回日本在宅医療連合学会大会

テーマ：在宅医療の未来を語ろう

～2025年問題に向き合い、2040年に備える～長崎から全国へ

会 期：2025年6月14日(土)～15日(日)

会 場：出島メッセ長崎

大会長：安中 正和(安中外科・脳神経外科医院 院長)

白髭 豊(白髭内科医院 院長)

【日本臨床衛生検査技師会・日本在宅臨床検査研究会 共催企画】 テーマ：在宅医療ダイバーシティ (diversity)

～臨床検査(技師)の深化～

座長：鬼澤 信之(日本在宅臨床検査研究会)

宮下 勉(日本臨床衛生検査技師会 職種別職能推進WG(在宅医療/救命救急))

演者：藤井 南(医療法人あんず会 杏クリニック)

高村 好実(一般社団法人日本予防医療推進機構)

岡田 章佑(医療法人社団 Plexus 大江戸江東クリニック)



登壇者集合写真

在宅医療が普及する以前は、医師を中心とした個別的な医療提供体制が主流であり、看護師やケアマネジャーなど他職種との連携は限定的であった。現在では、多職種がチームとして患者を支える体制が一般化し、ICT（情報通信技術）を活用した情報共有が進むことで、訪問診療や訪問看護の効率化が図られている。その結果、患者のニーズに応じた個別的かつ包括的なケアが実現し、在宅での生活の質（QOL）の向上が期待される状況となっている。

一方、今後の高齢化の進展に伴い、医療費や介護費の増大は避けられず、持続可能なシステム構築が求められる。また、新技術の導入により、多職種間での教育やトレーニングが必須となる一方、スキル格差の是正も重要な課題である。すなわち、在宅医療において



シンポジウム風景

は病院医療とは異なり、職域を超えた働き方が不可欠となる。

本セッションでは、このような職種間の横断的な取り組みを「多様性」と表現した。特に在宅医療の現場において、臨床検査技師には役割の多様性と専門性の深化が求められており、これらの課題に対応する具体的手段について議論が行われた。

登壇者は日本臨床衛生検査技師会・日本認知症予防学会・日本在宅臨床検査研究会に所属する医師および臨床検査技師であり、タスク・シフト/シェアの実践報告を含め、未来に向けた人材育成と教育の在り方について活発な討論がなされた。

第7回日本在宅医療連合学会大会

【日本在宅医療連合学会 多職種連携委員会 企画】

すでにここまでやっている！

でもあまり知られていない？

専門職の活躍（臨床検査技師・診療放射線技師・救急救命士・診療アシスタント）

医療法人あんず会 杏クリニック 鬼澤 信之

【日本在宅医療連合学会 多職種連携委員会 企画】

テーマ：すでにここまでやっている！でもあまり知られていない？

専門職の活躍（臨床検査技師・診療放射線技師・救急救命士・診療アシスタント）

座長：谷水 正人（南山山病院）

鬼澤 信之（医療法人あんず会 杏クリニック）

演者：大友 泰世（救命救急士・医療法人社団Plexus 大江戸江東クリニック）

近江 祐紀（診療放射線技師・医療法人元気会 わかさクリニック）

川端 城聖（臨床検査技師・医療法人あんず会 杏クリニック）

根本 愛菜（診療アシスタント・医療法人社団焰 やまと診療所）



臨床検査技師・川端氏の発表



シンポジウム風景

が期待される状況となっている。

一方、今後の高齢化の進展に伴い、医療費や介護費の増大は避けられず、持続可能なシステム構築が求められる。また、新技術の導入により、多職種間での教育やトレーニングが必須となる一方、スキル格差の是正も重要な課題である。すなわち、在宅医療においては病院医療とは異なり、職域を超えた働き方が不可欠となる。

本セッションでは、このような職種間の横断的な取り組みを「多様性」と表現した。特に在宅医療の現場において、臨床検査技師には役割の多様性と専門性の深化が求められており、これらの課題に対応する具体的手段について議論が行われた。

登壇者は日本臨床衛生検査技師会・日本認知症予防学会・日本在宅臨床検査研究会に所属する医師および臨床検査技師であり、タスク・シフト/シェアの実践報告を含め、未来に向けた人材育成と教育の在り方について活発な討論がなされた。



在宅医療が普及する以前は、医師を中心とした個別の医療提供体制が主流であり、看護師やケアマネジャーなど他職種との連携は限定的であった。現在では、多職種がチームとして患者を支える体制が一般化し、ICT（情報通信技術）を活用した情報共有が進むことで、訪問診療や訪問看護の効率化が図られている。その結果、患者のニーズに応じた個別的かつ包括的なケアが実現し、在宅での生活の質（QOL）の向上

国際活動報告

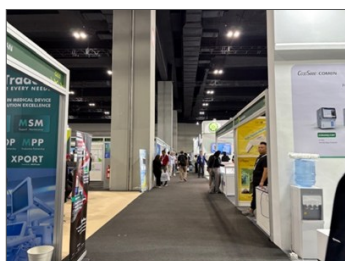
日本臨床衛生検査技師会 専務理事 小松 京子

34th National Scientific Conference of MIMLS in conjunction with WHX Labs Kuala Lumpur 2025 参加報告

2025年7月15日～18日まで、マレーシアで開催された National Scientific Conference of MIMLS in conjunction with WHX Labs Kuala Lumpurから招待を受け、JAMT代表として西浦明彦副会長、特別講演演者として筆者が参加した。この学会は900社の医療関連会社で構成される大規模な国際学会であり、マレーシアの臨床検査技師会も参画している。会場は9ホールで各ホールの企業展示の数はおよそ100社であり、企業は臨床検査の機器試薬関連会社だけでなく、手術道具、義手、車椅子、未熟児用保育器、治療薬など医療全般に関わる様々な機器や薬品が展示されていた。日本の学会展示場に比べるとスペースは広く、参加者は多いが混雑した感じはない。



参加900社の案内



各ホールはゆったりと見学できる

ホールごとにカンファレンススペースがあり、50人程度の参加者が聴講できる。

学会参加費は無料だが、氏名と所属などのデータをアプリで登録するシステムであった。日本からの講演者は1名(筆者)のみであったが、AAMLS(Asian Association of Medical Laboratory Science:アジア臨床検査技師会)加盟国である台湾やブルネイからの講演者と現地で会うことができた。

ホールNo.6の奥にIFBLS2026学会の宣伝ブースが準備されており、IFBLS2026学会宣伝ブースにポスターの掲示とパンフレットの配布を行った。日本での参加に興味を示す方々と話をすることができた。

また、IFBLS学会参加希望者からREGISTRATIONの開始の質問を受けた。IFBLS2026学会の具体的な情報は年明けにはお知らせする方向で考えている。



講演後、座長(マレーシア会長)と



2027年のAAMLS学会開催地のインドネシアのメンバーと

Short-Term Training Program in Japan for AAMLS members

昨年度まで実施したカンボジア技師会との交流事業は、今年度から形を変え、対象をAAMLS加盟国の臨床検査技師とし、日本での1週間の研修プログラムを提供した。

応募はAAMLS事務局を通し、各国の会長からの推薦とした。今回はインドネシアから2名、韓国から1名の合計3名であり、うち1名はインドネシアの技師会会長であった。実施期間は2025年9月28日から10月3日までで、大学病院、がん専門病院、検査センター、関連企業などを訪問し、JACLaS EXPO 2025を見学した後、日臨技事務所で国際WG委員による専門分野の最新情報に関するWeb講義を提供した。閉会式では横地常広会長より修了書が渡され、3名とも研修を終えることができた。本研修は初の試みであり、宿泊場所の情報やmeeting pointなどの連絡を密に行い、トラブルはなかった。参加者からのレポートには、大変勉強になったこと、最適なスケジュールだったこと、訪問したすべての施設が素晴らしかったことなどの感想が記載されており、大変好評であった。

今回の国際活動はIFBLS2026学会と時期が近いため休止とし、再来年度に再開する予定である。今回の評価をもとに、引き続き、自国での臨床検査技術等の向上に資するプログラムを検討していきたい。

ご協力くださった東京大学医学部附属病院、がん研有明病院、衛生検査所ならびに日本臨床検査薬協会のスタッフの方々に心より感謝申し上げます。



日本臨床衛生検査技師会での研修後

令和7年度 医療安全管理者養成講習会(基本コース)開催報告

令和7年度 医療安全管理者養成講習会（基本コース）も昨年度同様にオンデマンド配信と現地開催をセットで受講していただく形式で開催しました。受講者は10月1日～11月30日までの期間にオンデマンド配信を受講し、さらに10月4日（土）～5日（土）の現地開催への参加が求められます。現地開催はウインクあいち（愛知県産業労働センター）で行われ、44名が受講しました。受講者からの感想をご紹介します。

春日井市民病院 林 明奈

令和7年10月4日（土）5日（日）の2日間、日臨技医療安全管理者講習の講義を受講しました。私は生憎の雨空の下、若干の緊張とこれから始まる講義への大いなる期待を胸に会場の「ウインクあいち」に向かいました。

1日目は「パニック値の報告体制について」と「医療安全の課題とASUSHI/QSOプロジェクトについて」の講義、「研修企画」についての講義と実習、2日目はエラーの発生メカニズムと対策、ImSAFARの分析手順の講義とImSAFAR分析実習を学びました。

2日間の講義と実習を通して、講義では医療安全のこれまでの経緯、現在とこれからの取り組みについて学び、実習のグループワークでは講義で理解したと思っていたことも実際にやってみると難しかったり、どうしていいかわからなかったりすることもありながら、初対面のメンバーと意見を出し合い協力して試行錯誤しながら課題に取り組みました。どの講義、実習とも大変興味深くわかりやすい内容でした。

今回ご講義いただいた先生方、運営事務局の皆様方にこの場を借りて感謝申し上げます。今後はこの講義や実習で得た知識と経験を活かし、医療安全に貢献できるように取り組んでいきたいと思ひます。

広島市立北部医療センター安佐市民病院 下村 彩乃

現在私は医療安全チームの一員として活動しています。しかし「医療安全」について詳しく学んだことのない状態で担当になったため、「どうすればよいの…？」と悶々と悩んでいました。

そんな時、令和7年度医療安全管理者養成講習会（基本コース）の事前参加申し込みが始まっていることを知り、「医療安全のことが学べるなら参加してみたい！」と急いで申し込み、参加させていただきました。

講習会が始まるまでは少し緊張していたのですが、講師の先生方のご自身の経験や過去の医療事故の実例を取り入れた熱心な講義にいつの間にか夢中になり、あっという間に時間が過ぎていました。

グループワークでは、1日目に「研修会を企画しよう！」という実習で、研修会を企画・運営するときに考慮すべき事項等を学びました。中でも「一般目標（GIO）」「行動目標（SBO）」「評価」については今まであまり考えていなかったもので、今後は院内研修会や検査部での研修会に取り入れて行きたいと思ひました。



講習会の様子

2日目には「事故の構造と人間の行動モデルに基づく分析手法：ImSAFER®」について学び、その手順に沿って模擬症例に対して事象関連図の作成や問題点の抽出、レヴィンの行動モデルに沿って「P-E情報整理表」を用いた分析を行いました。この整理表では、まず行動直前のP（人間：当事者）とE（環境）を整理することで「現状の把握」をするのですが、分析対象者になりきって発生した事実を時系列に記載する作業は思いのほか大変でした。この後に「なぜなぜ分析」を行い分析対象行動の背後要因を推定し、考えられる改善策を列举、そして実行可能な改善策の決定をしていくのですが、この作業にもまた苦戦しました。

この難しい作業を1人で考えてと言われたら、今の私には無理だったと思います。今回、この講習会でグループになった参加者の皆さんと意見を出し合いながら協力し、この模擬症例に向き合ったことで一つの発表を作り上げることができました。同じグループになってくださった皆様に本当にありがとうございました。一緒に問題解決に向けて考えることのできる仲間の大切さを改めて実感しました。

この2日間の講習会に参加したことで、「どうすれば良いの？」という悩みはなくなりました。今回学んだことをできるところから実践していきたいと思ひます。そして、検査室の中に一人でも多く医療安全について一緒に考えることのできる仲間を増やせるよう行動していこうと思ひます。

最後になりますが、講師の先生方、また本講習会を開催していただいた関係者の皆様に感謝申し上げます。

令和7年度 認定救急検査技師制度 第2回 指定講習会(大阪)開催報告

テーマ：救急初期診療にて必要とされる知識と実技

認定救急検査技師制度は、救急患者の診療において適時かつ適切に対応することができる臨床検査技師の育成ならびに知識と技術の普及のために設立された認定制度です。

認定試験受験及び資格更新に受講が必須となっている、認定救急検査技師制度指定講習会では救急診療の情報を把握し救急診療を理解すること、救急患者に対して現状の検査機器を有効に使い安全・迅速・円滑・適切な検査ができる技術や知識、といった認定救急検査技師に必要な知識・技術を習得していただくことを目的に、テーマ毎の講習を行っています。

令和7年度の第2回指定講習会（大阪）の受講者からの感想を紹介します。

下脇 千恵子（市立豊中病院）

令和7年度認定救急検査技師制度第2回指定講習会を受講し「救急初期診療にて必要とされる知識と技術」について学びました。

事前にオンデマンド配信にてそれぞれの分野の先生から座学を学び、後日実技講習を受講するといった形式で非常に効率的な講習会だったと感じました。というのも、事前にオンデマンド配信を受講することで予習することができ、また理解があやふやな点や疑問点がはっきりしました。その上で実技講習を受けることができました。現地で講師の先生から説明を受けた後の実習で疑問点を解消し、また他の受講生の手技を見ることで「なるほど!」と思うことや「自分はできていなかったな」と色々な気づきもあり今回の講習会は非常に充実したものになりました。また、受講生一人一人に指導・アドバイスをいただいたこともありがたかったです。現在、当院では救急外来へ臨床検査技師は出向していませんが有事の際には今回学んだトリアージやBLSを活かし救急診療に貢献していきたいです。



実習の様子

四元 由香里（医療法人七徳化 大井病院）

去る9月28日、近畿大学病院で開催された令和7年度認定救急検査技師制度、第2回指定講習会「救急初期診療にて必要とされる知識と実技」を受講しました。来年度受験のための単位取得目的と近畿大学病院の救急診療を身近に感じたく、鹿児島県から参加しました。講習会はオンデマンド研修と現地講習で構成され、オンデマンド研修ではJPTECの病院前から病院到着までの救急医療体制、ICLSの救急初期診に必要な生命維持や蘇生のための基礎知識、また災害時トリアージについても学びました。災害時トリアージは平時か

らトレーニングを積んでいなければ災害現場で迅速に対応できないと痛感しました。それを踏まえて現地講習では、JPTECの外傷対応、BLSやACLS、静脈路確保やFASTを実践しました。今年度から救急外来が稼働し、サポートしておりますが、救急診療に必要な知識があって動くのと、そうでないのでは行動に差がでるのは確かです。今、必要な時だからこそしっかりと学び必要とされる検査技師でいたいと強く感じました。

三重県臨床検査技師会

「災害時における臨床検査技師の派遣に関する協定」を締結

三重県臨床検査技師会 会長 宇城 研悟



左から三重県臨床検査技師会 広瀬副会長、山本参与、別所副会長、宇城会長、三重県 服部副知事、松浦医療保健部長、西口医療保健部副部長、長谷川医療政策課長

三重県臨床検査技師会が三重県と「災害時における臨床検査技師の派遣に関する協定」を締結しました。

令和7年9月10日に三重県臨床検査技師会は三重県と協定を締結し全国では13番目、東海地域においては初となった。

締結式は14時から行われ、三重県からは服部副知事、松浦医療保健部長、西口医療保健部副部長の3名、三臨技からは、宇城、別所副会長、広瀬副会長、そして長年この締結に向けて行政や他団体と連携をとってきた山本参与の4名が出席し、詳細に決められた式次第に沿って進められた。当会では2019年頃に一度締結に向けた動きがあったがコロナ禍や諸事情によって協議が中断されていた。2024年頃、改めて行政と県医師会の窓を叩き協議を再開した。その間に発生したコロナ禍における臨床検査技師の活躍や能登半島地震での活動と災害に対する意識の高まりが後押しとなり、好意的な対応でスタートすることができた。しかし、行政側では災害対策という大きな枠の中に、非常に多くの部署が関わっており思いのほか何度も協議を重ねることとなった。逆に、締結が実現しなかった2019年から6年という時間のおかげで、感染症（インフルエンザ、新型コロナウイルス等）が疑われる際の検体採取や、避難所における衛生管理指導（手洗い、手指消毒、マスク着用等の指導）といった実態に合わせた業務や、能登半島地震における支援の教訓を協定書に盛り込むことができた。



締結式の様子
司会進行は長谷川医療政策課長

締結式はかなり緊張するものであった。指定された服装、豪華な控室、そこから案内された物々しい式場、報道機関が来ていなかったのが残念ではあったが少し安心した。副知事の上手な挨拶の後、当会から御礼と想いを述べ、協定の説明、協定書手交、記念写真と続いた。協定を締結するのが目的ではなく、新しいスタートであると強く感じたのは、最後の団らんであった。副知事や県の幹部を交えて今後、技師会と行政がどのように連携していくかを具体的に話し合えたことである。行政主催の訓練への参画や、技師会主催の勉強会に対する行政からの協力など新たなプロジェクトが始まるのである。まずは令和7年度日臨技中部圏支部医学検査学会（11月2日）の中で三臨技企画として「災害協定はなぜ必要か」と題し行政の立場から臨床検査技師へ期待することを述べていただくこととなった。

最後に、災害はいつ発生してもおかしくない。私たちは今回の協定を第一歩として、日臨技や臨床検査薬卸連合会、行政や関係団体と連携し、災害時に臨床検査技師が社会に貢献できる持続可能な仕組みづくりを進めていく所存である。

当会では国民の皆様にも臨床検査技師の存在をもっと知っていただくため 季刊誌『ピペット』を発行しています。

2025 夏号 (vol.48) にも読後感想として、たくさんの感想や応援メッセージをいただきました。

医療現場で働く会員の皆様にも励みにしていただきたく、寄せられたメッセージをいくつかご紹介いたします。



- 私は「エコー検査」で「すい臓がんを発見。15年生きております。感謝の日々です。（長野県・男性）
- 今やがんも早期発見で助かる時代なので臨床検査技師の必要性をより感じました。（千葉県・男性）
- 市の健診をまだ受けていなかったのので、必ず受診しようと思いました。（岩手県・女性）
- 2年連続で入院し、いろんな検査を受けましたが、本誌にわかりやすく説明がしてあり、安心しました。（愛知県・女性）
- いつも思うのは血液検査のすごさ！何でも分かると言っていいくらい検査項目が多いけど1時間程度で結果がでるのすごい！（東京都・女性）
- 毎月血液検査をしているので、表紙写真の解説に興味を持ちました。毎回、試験管を数本付け替えますが、何のための採取なのか知りたいです。（鳥取県・男性）
- 堀ちえみさんのインタビューを読み、臨床検査技師のデータに基づき、医師が治療方針を決定することを改めて認識しました。（山梨県・男性）
- 堀ちえみさんの「希望を持って諦めず医療を信じる事」印象に残りました。（香川県・女性）

『季刊誌ピペット』を配布いただける施設を募集しています。
冊子・送料は無料です。イベント等での単発の配布も承ります。

ご協力いただける方は右のURLから「配布協力施設登録申込用紙」をダウンロードし、ご記入の上、当会事務局までFAXまたはメールでお申込みください。

過去号をご覧になりたい方はQRコードからも閲覧いただけます。

<https://www.jamt.or.jp/books/pipette/>

Fax: 03-3768-6722

mail: pipette@jamt.or.jp



（編集後記） 11月は霜月ともいいます。読んで字のごとく霜の降りる時期に当たります。山々では紅葉が見ごろを迎えています。そして冬が一步一步近づいてきています。会報JAMTいかがでしたでしょうか？今号は「在宅医療特集」「国際活動報告」「医療安全管理者養成講習会（基本コース）開催報告」「認定救急検査技師制度第2回指定講習会（大阪）開催報告」「災害時における臨床検査技師の派遣に関する協定（三重県）」の内容でお届けしました。ぜひご一読いただき、本号が皆様にとって価値のある一冊になれば幸甚です。

（植木）